

プロのNGOが活躍できる社会に

日本緊急救援NGOグループ(JEN) 現地統括責任者 木山 啓子

私が国際協力の道を志したのは、アメリカに留学した頃からです。さまざまな人種が共に暮らす国で、人々が互いに助け合い、しかもそれを喜びとする様子を間近に見て、私も国際社会で何かできればと思ったのです。

帰国後、企業に勤めたのですが、東京でのペーパーワークに飽き足らず、どうしても直接異文化がぶつかりあう現場に入りたくて、NGOのAMDA(アジア医師連絡協議会)に入会。まもなく旧ユーゴスラビアの難民・被災民を支援する日本緊急救援NGOグループ(JEN)に派遣されました。以来、私の生活は難民、国連組織、日本社会それぞれとコミュニケーションをし、心と心の結び付きを求める毎日です。

●心のケアを中心に

JENは1994年1月に設立された日本のNGOの協力ネットワーク組織で、AMDA、アフリカ教育基金の会、カンボジアの子供に学校をつくる会、ケア・ジャパン、国境なき奉仕団、日本国際救援行動委員会、立正佼成会の7団体が加盟しています。いくつものNGOがまとまって連合体を組織し、大規模に現地で活動するのは日本では初めてなので試行錯誤の連続ですが、忘れられがちな難民の「心のケア」を中心に、家庭訪問による心理カウンセリングなど、現在までに約40のプロジェクトを旧ユーゴ全土で実施してきました。

本当の意味で効果的な活動ができるよう、現地コーディネーターとして私はまず、難民の声をじっくり聞くよう心掛けています。プロジェクトの押しつけや、少しでも「やってあげている」

という態度はJENの精神でもある相互扶助精神にそぐわないものです。現地においては「一緒に暮らす対等な者同士」という感覚が大切でしょうね。



1982年、立教大学法学部卒業。米国ニューヨーク州立大学バッファロー校修士課程修了後、帰国。電気メーカー、開発コンサルタント会社等を経てAMDA入会。94年、JENに派遣される。旧ユーゴスラビア現地統括責任者として多くのプロジェクトを実施。

●人は心を求め合うもの

人の意見をよく聞くというのは、仕事柄必要というだけではありません。現場にいと、自然とそうしたいという欲求にかられてくるのです。

クロアチアの首都ザグレブから車を走らせて、セルビア人居住区に行った時のこと。救援物資も滞り、誰からも振り向かれず苦しんで、生きているだけという人々に会いました。セルビア人は悪玉とされて欧米のNGOなどは支援の対象から外している状態なのですが、私たちに会うと、彼らは皆涙を流して喜んでくれるのです。何もしてくれなくてもいい、ただよその土地から自分に会いに来てくれる人がいた。自分は世の中から見捨てられたわけではないのだ、と握った私の手を放さずに、現地の言葉で訴え続けるのです。

人と人がいかに心を求め合う存在か、痛感します。「そこにいる」人を、「あなたはそこにいるのね」と存在を確認すること。これがコミュニケーションの原点ではないでしょうか。

直接現地で活動を行う「顔が見える」国際協力という点では、日本は欧米に比べ歴史が浅く、ヨーロッパで活動して「日本人がここで何をしているの」と怪訝そうに言われることもありました。でも、私は欧米圏でない日本人だからこそできることもあると信じています。今ではJENの存在も認められ、国籍を超えたNGO同士のネットワークも生まれています。

●市民意識の向上を願う

そんな経験を積んで痛感するのは、日本も欧米のようにプロフェッショナルなNGOが活躍する社会になれば、ということです。欧米のNGOでは、必ずプロがプロジェクトの中核となり、その回りにセミプロ、ボランティアが続き、その土台を組織的にバックアップしてくれる構造が整っています。

これを可能にしているのは市民の意識の高さです。国際社会の一員として多くの一般人が人、モノ、金を拠出してくれるというバックがあるからこそ、NGOのプロが存在できます。

日本が10年後そうなるために、私は市民の意識の国際化のお手伝いをしたいと思っています。そのために、日本からの訪問団を積極的に受け入れるなど、一人でも多くの日本人が国際協力に関われるように場を設けていきたい。それが遠回りのように見えても一番近い方法だと思っています。